

娘

一

今日は新しく弟子入があるといふので、師匠は秘藏の梅酒の口を切つたり、お茶の用意などさせたりして置いた。是非にと頼まれることはあつても、この節は大抵斷つてゐた。お針の師匠をして生計をたてゝゐるのでもないので、座敷に一ぱいになるやうな弟子もとらず、親類や、そのつてゝ頼まれて餘儀なかつたのを四五人預つた。それがその妹をといふことになり、今度はまたこの人も是非と言はれて、多い時には日々六七人ばかり集つた。また田舎の素封家などから、扶持もちで見習かたがた寄宿してゐる娘が一人二人はあつた。

今日のお弟子は、三里ばかり離れた隣町の商家の一人娘で、そのうへお祖母さんそだちの我儘一ぱいなのを、そんなにいふことをきかないなら、どこかにやつてしまふやつてしまふと嚇しつけたのがほんたうになつて、今日はいよいよ送られて來るのである。

しかし娘は喜んで来た。何かしら潜んだたのしみが自分を待ち受けてゐるやうに思はれた。他人の中は辛いものといふ、その辛いものにもたのしみな期待をもつて祖母に送られて来た。

娘の生れたK——町と、このS——町の間は、汽車で殆ど二十分ばかりで往來することができた。

S——町のはづれにある停車場に着くと、俵を二輛呼んで、蹴込に大きな鞆を置いた。場末からそろそろ暇な通にならうとしたところで、娘は途中まで迎へに出た友達に逢つた。

『やあちやん。』と、なつかしさうに俵の上から聲をかけた。すぐにもう一輛俵が呼ばれた。

この友達は多田彌生といつて、一三年前に夢中になつて愛讀した「少女界」で知つた名である。

K——町の名所は櫻、S——町は牡丹園、そんな花見の使などから、お互に一二度顔も合せて、今度のこともこの彌生が仲に立つて口をきいたのである。でもまだ逢つてしみじみ話したことはなかつた。

三臺の俵は續いて走つた。若い娘と娘は、まだ氣心の知れぬ心と心の離ればなれなのを、手紙の往復や、ちらちら受けた目の印象や、或は新しいうれしさでもつて結びつけようとした。

祖母の俵は一番先に走つた。次が娘、續いて彌生、その三輛の俵が、一まづ彌生の家の玄關に止つた。そこで、娘達が結んだ不思議な初對面の挨拶が親達の間に取り交された。三人はそこから歩

いて程遠からぬ師匠の家に行つた。

庭に出て張物をしてゐた年の若い下女が、垣根越に三人の姿を見て、

『來やしたぞい。』と、家の中に注進をしたので、師匠は眼鏡をはづして襟をかき合せながら坐を立つた。その下坐に並んでゐた娘達は、お互に一寸針の手をとめて顔を見合せた。

『さ、どうぞずつとこちらへ……』

娘は、思つたよりも若かつた師匠の口から、まづはつきりとしたこの言葉を聞いた。初對面の挨拶が一應すんでから、師匠は、

『やあちやん、どうも御苦勞さんでした。』と、新しい弟子の脇になほ坐つてゐた彌生に一寸笑顔を向けて、

『なんでございましたねえ、降るかと思つたら降りもしませんで……』と、小さく坐つてゐる祖母の方へ言葉を繼ぐ。

師匠の發音はこの邊の土地の者のやうに濁つてはゐなかつた。染めてるのかは知らないが、黒々とした髪を小形な丸髷に結つて、やや角がかつてはゐるが、その顔の色は艶々としてゐる。坐つたところの少し猫背氣味な、きちんとした着物の着方は、一目で子供のない人といふことがわかつた。

『まことに飛んだ御縁で、届かないものをお頼申しやす。まことにはや我儘者でござツリやすから……』と、小柄な祖母がしみじみいふのを引き取つて、

『手前どもこそ少しも行き届きませんでございますよ。みつちりお世話申すことができるといゝんですけれど、何かとこの節は用が多しするものですから……どなたもお預するのを斷つてゐたんですが、やあちやんがたつてせがむもんですから、つい行き届かぬながらお預することにしまして……』と、師匠は緩く揉手をしてゐる。

お茶の道具などを運んでゐた、銀杏がへしに結つた若い嫁が、

『お母さん、あのお土産を……』と、そつと後の方から、笹の葉の上にねせた松魚を一尾見せた。祖母は心祝にと、途中の魚屋にそれを頼んだのであつた。

『まああなた、とんだ御心配を……決してそんな御心配は御無用ですのに……どうも有り難う存じます。』と、師匠は丁寧な禮を言つた。

祖母が一寸、後に坐つてゐた娘の方を振り向くと、娘は心得て手提鞆の中から、紙包を幾つも取り出した。

『皆様にお菓子でもと思ひやしたが、つい大いそぎだつたもんですから、何の用意もしてまゐりや

せんで……』と言ひながら、祖母はそれを引き寄せて、『甚だ粗末な物ですが、これをどうぞ一つづつ皆様に……』と、師匠の前に押しやってやつた。

障子を隔てた座敷の中に、俛いて時々ちらちらを見てゐる娘達の、白い顔や赤い櫛などが硝子の中に見えた。紅入メリンスの半襟が一つづつお土産としてその前に配られた。娘達はやがてひとりびとり出て来て挨拶をした。

『どうぞ皆様、よろしくお頼申しやす。』と、祖母は一々丁寧にお時儀をした。

今の今ままですき自由に振舞つて來た娘には、それらの悉くが何となく窮屈に思はれて、初めて心ぼそさの思が湧いて來た。

『おくちやん、こつちへ來い。』と、時々座敷の娘達と笑顔を見交してゐた彌生が、先に立つて、早い土地言葉で呼んだ。

娘の名はお糸と言つた。糸といふのをおくちやん、彌生のことはやあちやん、さういふ風に、このあたりでは大抵片名を呼んだ。時には短く、やあちやなどとも呼ぶ。

紅絹裏の燃えるやうなのを、紋のところを紙をあてた小紋の表に合せてゐる束髪（たばき）の娘もゐた。末座の方に覺束ない手つきをして、單物を縫つてゐる小娘もゐた。彌生もその中に交つて自分の仕事

のつづきにかゝつた。お糸はその前に坐つて、有り合せた糸巻を手玉に取りながら、人々の手許に眺め入つた。

お糸はふつくりとした桃割に結つてゐた。先方は舊式な家庭に違ないからと、祖母の指圖で、久しぶりで日本髪にあげさせたのが、油を嫌つて結びあげたので、髪の毛はちらりほらりとゆたかな頬に散れかゝつた。それがまた一入の趣を添へるほど、お糸は美しく生れてゐた。

まだ浴衣に早い頃で、赤味がかつたネルの單衣に、銘仙の羽織を一寸引つけてゐた。少し目につく服装をすると、すぐに小さな町の者にかれこれ言はれるので、地味な柄ばかり身につけなれた娘達には、お糸のしつくり體に合つたつくりが、羨ましくもねたましくも見られた。

祖母は間もなく、くれぐれも娘の事を頼んで、思切わるさうに暇を告げた。お糸もさすがに心細さは迫つたが、元氣よく門口まで送つて出た。

『祖母ちゃん、心配しつさんなよ。』と、袖を引いてそつと言つた。言つて自分も涙がこぼれさうになつたが、あがり口に見返つて立つてゐる師匠と顔を見合すと、こぼれるやうになつと笑つた。

『おつしよ様さいなら。』

『お島さんさいなら。』

『皆様さいなら。』

あがり框に手をついて、皆かう言つて一人二人づつ歸つて行つた。最後の一人が、薄緑に帯をあてゝ小切や綿屑を掃き出すと、疊のそそくれにかゝつて残つた絹絲の端がふらふらとして、薄い濃い闇がだんだんと家の中に籠つて來た。

きいきいと釣瓶の音がしきりにする。廣い臺所に、釜は盛に泡を吹いて、人は誰も見えなかつた。

あはあはと笑ひ崩れる聲が止まないの、師匠は納戸から出て來て見ると、子供が水いたづらにする時のやうに袂を背中に結んだお糸が、水を汲むとて釣瓶の縄に縋つて力を絞つてゐた。そのなかなか汲み得ない形がおかしいと言つて、嫁のお島さんと下女のお辰が腹を抱へて笑つてゐるのである。お糸の生れた町には水道があつた。

『まあおくちちゃん、そんないろいろなしくなくたつていゝから休みなんしよ、え。』と、師匠が笑ひ笑

ひ言ふと、

『そんぢやつて先生、して見たいんだもの。』と、につこりして、今度は家の脇から草帚を持つて来た。

『あゝそれぞれ紙屑を拾つて拾つて。』と、長火鉢の前にちよこんとしてゐた旦那様が突然聲をかけたので、お糸はびつくりして、つと塵取の手を放した。お鳥さんがちようど入つて来て紙屑を拾つてくれた。お糸は何となく旦那様が怖い人のやうに思はれた。

あくる日は彌生が一番先ににこにこしながらやつて来た。

『旦那様お早うごす。』

『おつしよ様お早うごす。』

『お鳥さんお早うごす。』と、挨拶がすむや否や、『おくちさんお早う、泣かなかつた？』と、笑つてきいた。

彌生とお糸は同じ年の十七であつた。たゞお糸の方が四月ばかり早く生れてゐる。二人ともまだ肩あげは取れてなかつた。

おくちさんおくちさんと、お糸を中心にした話が、それからしばらくの間續いた。ひよつこりひ

よつこりと面白いことばかり言つて皆を笑はせるので、師匠が時々、

『おくちやん、ちつとも手の方が動かねんでねえかい。』と、笑つて言ふと、

『そんぢやつて先生、祖母ちゃんはお針なんてどうでもいゝから、臺所のことをよく習つて來うつて、さう言つたんだもの。』と、きまつてかう言つてすましてゐる。お糸ばかりは師匠の事を先生先生と呼んだ。先生なんていふと何だかふさはなくてをかしいと皆がいふと、「お師匠様なんて、そんな面倒臭い寺子屋のやうなことは言へないもの。』といふ。

お糸は祖父と祖母とにあてゝ長い手紙を書いた。師匠の家内は、師匠夫婦に息子の義雄さんとそのお嫁のお鳥さん、下女のお辰と、それから二三日前に貰つて來た小犬と猫が一匹、猫の名は玉といふこと、犬の名はまだきまらないこと、旦那様は毎日程近いところの生絲の合資会社に出かけて、先妻の息子の義雄さんは一年志願の中尉であること、日露戦争に負傷をして戦なかばに歸り、今でもなほ歩く時には少しびつこをひくこと、その人はよく木綿の紋付の羽織を着て、かき餅が好きなこと、家のまわりが廣くて、裏の畑には惣菜ものを作り、物置小屋の屋根にかけて這はした南瓜の棚には、黄色い花が咲いたことまで書いて、筆を持ったまゝ、兄さんは今紋付の羽織を着て、かき餅を焼いてゐますと節をつけて讀んで聞せた。遠い遠い水車の音を聞きながら、洋燈の下の夜なべ

に眼鏡を光らしてゐる師匠の顔は冴々とした。

仕事をする部屋は客間に續いた八疊で、縁近くの霧島が硝子に盛つたやうにうつる障子の際には師匠が坐つた。それに續いては一番かさのお島さん、お節つあん、お糸は彌生とお信ちゃんといふ娘との間に坐つた。

壁に寄せて横にした茶箱を二つ重ねて、その中には紵臺やら、針箱やら、ものさしやらがごつちやにはひつてゐる。箱の上には出来あがつた着物をのせておもしろをかけて置いた。そのならばはお島さんが坐つてゐる。それからお島さんの生家に世話になつてゐる娘が一人来てゐた。下女も後かたづけがすむと仲間に入つて、隅の方で解きものや綿ほぐしなどをやつた。

庭の敷石の間々に、松葉牡丹の柔い花が咲き始めた。外庭にはダリヤも咲いてゐる。すういと薄い翅を縦にして去つた蜻蛉の行方を、折しもお節つあんが紵臺に肘をついて、針の頭で齧齒をつゝきながらぼんやりと見送つてゐると、

『御來客おめでたう！』と言つて、誰やらがくすりとした。お節つあんは氣が付いたやうに一寸赤くなつて、急いで紵臺をぐいと引き寄せて針をかけた。

『あら良助！』

お糸が突然高い聲を出した。自転車を小脇に曳いて、烏打帽を冠つた白いズボン下の男が門をはひつて来た。

『良助、良助、よく来たなあ。』と、お糸はなつかしさうに言つて、あがり口に飛び出した。

良助はお糸の店に十二の年から世話になつてゐる男で、お糸はよく小さい時に友達と喧嘩をして負けるとこの男を連れ出した。良助はまだ若いけれども働ける男だと、祖父はいつもさう言つてゐた。S——町の取引先に度々自転車でやつて来るのである。

『おくちちゃん、祖母ちゃんが言つてよこしたげつともなつし、水を氣を付けつさんしよつて。』

良助はこんなことを言ひ置いて歸つて行つた。祖母の丹精だからといつて、ハンドルに結び付けて来たお重を開いて見ると、白餡のあんことがはひつてゐた。

三

『……そんな人は私の生徒ぢやない、私の生徒ぢやない、私の教へてゐる生徒の中に、そんな人がゐたかと思ふと私は口惜しい！ お乳を白木綿で巻いたり、窓から首を出して男の生徒と顔を見合して笑つたのと……そんな、いゝえ、それは嘘に違ない、私の教へてゐる生徒のうちには、そんな

人はゐない筈だもの、それはどこかの人に違くない、この私が教へてゐる高等四年の生徒ではないのでせう、女はお乳が大きいのがあたり前です、何も恥しいことも隠すこともないのです。それが却つて女の美しいところなのです。それをわざわざ白木綿で巻いたりなんかして……そんなそんな馬鹿なまねをする人がどこの國にありますか！ まあ幸に私の組には、そんな馬鹿なまねをする人はないのでせうけれども……もしあつたら私はその人の爲に泣きますよ、皆さんはまだ無邪氣でなければならのです、また男の生徒に對してもですね、とかく人はいろいろなことを言ひたがるものだから、氣をつけた上にも氣をつけなければならぬです……』

彌生は拳を握つて、ある時ある折の受持教師の口吻をまねた。

師匠は昨夜、生家の母親が病氣との電報を受け取つて旅立つたので、今日は一日朝から座敷のうちがざわついた。

『あの時は、山田先生は本氣になつて怒つたつけ。唱歌の時間だつたげつとも、はじめからしまひまでぶうともすうともオルガンを鳴さないつちまつた。涙をこぼしてぶるぶるつてるんだもの、おつかなかつたわ。』

『そして白木綿でお乳を巻いたつて誰だつたの？』

『やつばしお涼さんだつたか知れない。あの人はおとなだつたもの、今考へて見つとよく解るわ、私等が鬼事をしたり、陣取をしたりする時に、ことによつといくら引つ張つて來ても、いつの間にか脱け出して、編物なんてばつかししてる時があつたつけ……もうあの時分からなんだつたのな
知らねもんだから無理やりに引つ張つて來て、しまひに怒られつちまつたことがあつたつけ。』

『やあちやん、やあちやん、お乳を白木綿で巻いてどうしんの？』

『知らないそんなこと！ あんまり大きくつてきまりがわるいからなんだつて。』

『一體あのお涼さん、今どうしてんの？』

『東京にゐるつていふ話でねかい、誰とかの妾してんだつて……』

『嘘う、まさか。』

『うゝん、ほんとなんだつて。』

『あのお涼さんが？……』

『えゝ。』

『まあ！』

『山田先生つてば、あの先生も惜しいことしたのな。』

『ナイチンゲールだの、ジヤンヌダルクだのつて、あんな話が好きな先生だつて。』

『私はあの先生きらひだつた、氣取つてんだもの、「あらさう！」なんて。』

『そんぢやつていゝ先生だつたわ、熱心で。』

『少しおしやれだつたない。』

『さうでもなかつたのに、そんぢやげつと嫁に行つてからは得意らしかつた。』

『山田先生、山田先生、お墓まゐりに行つて見たいなあ。』

『青山に埋つたんだつて……』

『えゝ、狩野病院の中で死んだんだつて、お安つあんが泣きながら書いてよこした手紙見て、あんな時私も泣いたわ、大變出血したんだつてない。』

『おゝやだ！』

『あの先生のごつたから、氣はたしかだつたつていふわ。ずっと氣が遠くなつて行ぐんで、しつかりなさい！ ていふと、これだけしつかりしてたらいゝぢやありませんか！ つて醫者のことも叱りつけたんだつて。』

『赤兒もだめだつたの？』

『死んで生れたんだつて……子供はどうしました子供はどうしましたつて、度々聞いて』たつて。』
『うゝむ。』

『とにかくあの先生が産で死いぐなんて思ひもかけなかつたない。』

思ひ合したやうに皆だまつた。

軽い倦怠の氣の揺れる七月の眞晝を、ほがらかな飴屋の笛が生垣に添うて流れて行く。

しばらくすると、誰やらがくすりと笑つた。ふつと皆が一樣に顔をあげて、あたりを見廻した。やがてその目と目が互に見交してまた俛くと、くすくすと崩れるやうに笑がうつつた。間もなく、くつくつと押し潰したやうな聲が洩れたと思ふと、眞先にお信ちゃんのはつと聲を出してしまつた。どつといつしよにそれがうつつた。

『あゝあ、どうしてかう眠かつぺ。』と言ひながら、お鳥さんも笑つて針を持ち直した。併しまたしばらくすると、その姿勢のまゝ電氣の止つた機械のやうに動かなくなつて、ほつれ毛の首がこくりこくりと前に揺れる。

お節つあんは意味あり氣にお鳥さんと顔を見合してにつとした。お糸もお鳥さんが昨日裏に行つてげいげい言つてたのを思ひ出した。

『緑もぞ濃き柏葉の……』

お糸はだしぬけに、寮歌を中音で歌ひ出した。

『蔭を今宵のやどりにて

ゆふべ敷寝の花の床

旅人若く月細し……』

彌生とお信ちゃんが續けて、調子がやゝ高くなる。

『しっ！』と、お節つあんが針の手を止めた。

『大丈夫！』と、お糸は笑つてすましてゐる。

『義雄さんは？』

『さつき、なんだか出て行つたもの。』

『さう。』と、お節つあんも安心したやうに笑つた。

『何か喰べたい！』

小さな聲がお糸のあたりから起つた。お信ちゃんがものさしでお糸の足の平をつついて笑つた。

ぽきりと糸を齒で切つて、針さしに針をさしたお節つあんが、針箱の引出をがらがらいはせて、

何やらむくむくとした手に握つたと思ふと、

『お辰つあ、なんでもいゝから……』と、小さな銀貨を隅の方にゐた下女の前にはいと投げやつた。

『仕様のない人達だなあ。』

やうやう本氣に目を覺したお鳥さんは、せうことなしにたゞ笑つた。

四

西村島子二十二歳、竹内節子二十歳、多田彌生十七歳、吉田信子十六歳、お糸は當用日記の人名欄にかう書いた。お島さんと同い年のお鳥さんはおのづと別ものになつて、この五人の心は絶えず並行して進んだ。お糸は殊に彌生に親しみ、お島さんとお節つあんはまた一つ體かと思ふほど、何をするにも離れなかつた。一番年の行かないお信ちゃんは、何事もたゞ二人がするやうにしてついで行く。

流行の中心はお糸にあつた。東京の伯母さんから送つて貰つた帯だの、祖父が京土産の襦袢だのと、すべてが土氣を脱けたこのみであつた。

娘達は鰻を焼く火鉢のまはりに集つて、風呂敷の下から「三越タイムス」などを引きずり出し、都の流行に就てかれこれ言ひ合つては、アルミのお辯當箱の蓋を鳴したり、過つて梅干の種を灰の中に落したりした。

お糸は一日齒が痛くて、四疊の部屋に籠つて一人で寝てゐた。少し痛が薄らいで、うとうととなりかけた時、

『はい、おくちゃん郵便。』と、お辰が一封の手紙と寫眞を持つてはひつて來た。

『ありがたう。』と言ひながら、お糸は一寸裏書を見て唇をほころばした。紙撚を解いて中身を引き出すのを、それまで立つて見てゐたお辰が、

『おくちゃん、それ誰?』と、覗き込まうとすると、

『誰でもない!』と、お糸はそれを隠すやうにした。

『なんだか軍人みたいな寫眞……』と、お辰が座敷に歸つて來てさう言つたので、

『軍人?……洋さんのだな、きつと!』

ちようど仕事に飽が來てゐた彌生は、いきなり立つて四疊へ行つた。

ばたばたと争ふやうな音が聞えたかと思ふと、

『だめだつてば、やあちゃん、だめだつてば……』と、お糸の懇へるやうな聲が聞えた。彌生はここにこしながら、逃げるやうにして出て來た。

『どれ！』

『どれどれ。』

一枚の寫眞が手から手と渡つて行つた。

『どれ、やあちゃん見せて見なんしよ。』と、師匠も眼鏡に一寸手をかけて、膝の上のものを押しやつた。

『これが何かい、そのいひなづけつていふ人かい、ふむ、なかなか立派な男だない。』と、師匠は飽かず眺めてゐる。

ひそひそとお糸の噂が出た。お糸は祖父母の養子の子で、母親は夫が死んでから生家に歸つてゐること、いひなづけの人はその身内の者で、一年志願の少尉になつて今なほ入營してゐること、お糸はやがてその人を婿にして、砂糖商の家業を繼がなければならないこと、こんなことは多く彌生が知つてゐた。

お糸はその日は一日座敷に顔を見せなかつた。

『怒つてんだか知れない。』と、彌生は歸る時にそつとまた四疊へ行て見た。

封の切れた手紙が油氣のない髪の下になつて、お糸はすやすやと寢入つてゐた。

お信ちゃんは絲屋の娘であつた。ある日師匠から絹絲を持つて來るやうに頼まれたので、あくろ朝は忘れぬやうにその用意をして持つて行つた。いつもの仕事座敷に來て見ると、既に皆は揃つてゐた。襖の陰の客間からは、賑な話聲が洩れてゐた。お銚子を運んで行くお鳥さんに、

『お客様？』ときいて見る。

『えゝ。』

『誰？』

『良人の友達。』

お鳥さんはかう言つて、そつと襖を開けた。酒の肴と煙草の匂の満ちた中に、三四人の顔がふとこちらを向いた。師匠はその時お信ちゃんが來てゐるのを知つた。

『お信ちゃん、絹絲を持つて來てくれたかい。』

しばらくしてかういふ師匠の聲が聞えた。

『はい。』

『どれ、こゝへ持つて来て見い。』

お信ちゃんは皆の顔を見てぺろりと舌を出した。けれども何の氣もつかずに、絲の包を持つて立ち上ると、

『あ、お信ちゃん、一寸一寸。』と、お節つあんが呼びとめて、赤いさし櫛の曲つたのを直し、袂についてゐた絲屑などを取つてくれた。

お鳥さんと、お節つあんと、お鳥さんの意味ありげな微笑に送られて、お信ちゃんはへだての襖を引いた。

背の低い義雄さんがあぐらに崩れて、盃をさし交してゐる傍に、師匠の顔もてかてかと赤味を帯びて、五十ばかりの品のいゝ女と向ひ合つてゐた。

間もなくお信ちゃんは、ほつと赤くなつて出て來た。

『眼玉の大きな人。』と、罪もなく言つて笑つてゐる。

彌生も、お糸も、お信ちゃんも知らずにしまつたが、翌日そつとお節つあんはお鳥さんにこんなことをきいてゐた。

『どうだつたえ。』

『少し若過ぎるつてさう言つたつて……』

すぐにそれを悟つてしまふほど、お節つあんはそんなことになれてゐた。さうしてそれがまた師匠の癖であつた。

取り立てゝこれといふのはなくても、若い娘ばかりが並んでゐるのははなやかなものであつた。色の白い愛嬌のある顔が殊に目立つて、あれはどこの娘ですえと、茶話に來たおかみさん達にきかれることも珍しくない。

師匠は澤山の娘を持つた親のやうな氣がしてゐる。

お節つあんが十八の時に、手を携へ品を携へて望んで來た家があつた。師匠は中に立つて随分骨を折つたのだが、親達は、あれは親類にやるつもりですからと言つてきかなかつた。それからも度方々から話があつたけれど、師匠のやうに親達はさう氣を揉みもしなかつた。しまひには師匠も張合がなくなつて、さう世話も焼かなくなつたかはり、あまりいゝ感情は懷「いてないらしかつた。

お島さんは家持だからお嫁にはやられない。器量もよし品もよしするのだから、嫁ぐのなら随分いゝところへも行かれるのだが、養子をするのでは思ふやうに行かない。こつちでほしいやうなのは先方でいや、進んで來るやうなのはこつちで御免蒙りたい方で、母親が氣を揉んでゐるにしては

なかなか縁が遠いのである。お島さんはつくづくそれを厭がつて、絶えず仲の好いお節つあんに悲観めいたことを言つてゐた。お島さんの家はお女郎屋である。お女郎屋の婿さんに、お島さんの氣に入るやうな人は來なかつた。

彌生とお信ちゃんにはまだ先がある。師匠はこの二人をやがて自分の手でどうかするつもりである。昔の弟子の一人二人は、師匠の媒で嫁入をした。さうでなくても自分の弟子が相當な縁につくのを非常に喜んだ。お鳥さんが義雄さんのところへ嫁入の時に——お鳥さんも昔は風呂敷を抱へて、その頃はやつた雪駄を履いてお針に通つてゐた——七人のお友達がずらりと裾模様を着て並んだ姿を、お雛様のやうだつたと師匠は今でも時々それを言ひ出した。その時その仕度のまゝで寫した寫眞は、五年経つたので色が少し薄くなつたけれども、今でも納戸の箆笥の上に飾られてある。

『やあちゃん、官員様にも、商人にも、どつちにも向く。』

師匠はある日、口のすさびにこんなことを言つた。彌生は何の考もなくただ笑つてゐた。お嫁になんか行くものかと心の底で思つてゐる。しかし私もやはりさうは思ひながらも、あたり前の女になつてしまふのではないかとも思ふ。何にしてもそんなことは遠いことだと思ふ。一日一日と日を積んで行くうちには、いつの間にか運命といふものが形づくられて行くに違ないと思つてゐる。

八人といふ澤山な兄弟の三人までは東京に出てゐるが、思つたやうな成功もしてないので、彌生だけは苦しくない商家になりとかたづけたい親達の下心である。若手の立派な技倆のある學士なども追々入り込むし、持病の喘息が折々起つたりして、多くの家族を養ふのはなかなか容易ではなかつた。町の舊家ではあるが、彌生の父は年老いた醫師であつた。

五

山の寶屋と人が呼んだほど、師匠の家は町の雜間を遠ざかつてゐた。近い小學校に時間毎のベルが鳴り響くと、時にはわあわあといふ運動場のさわぎが家の中に流れ込む。

なこの頃増築の議が町會を通過して、隣合つてゐた丸龜といふ材木店は、その地所を引き拂はねばならなかつた。四五日前からその家を曳くとて、多くの土方が丸太を持つて喚きあつてゐた。

『よいとまいとう、よいとまいとう。』

丸龜の主人が、空家の床に立つて音頭をとるのが、日長のつれづれに口まねされて、家は少しづつ動いて行つた。ある日は道の出鼻にその家が來て日が暮れた。

つまたい雨が降つては、掘りかへされた赤土に水を含んで、馬車の轍の行きなやんだ跡に、風呂敷包を抱へた娘達の下駄が吸ひ取られた。

秋の彼岸のすんだ頃から、お鳥さんのお腹は人の目について來た。目のあたりには隈が出來、妊婦の黒い斑点も見えて、顔には著しく脂肪氣を失つた。時にはふつと針の手をとめて、帯のあたりを眺めてゐることがある。

『動くのかい？』と、師匠にきかれて、

『はあ、なんだかかう握拳でもつつぱられるやうで……』と、お鳥さんは寂しく言つて笑つた。

『お鳥さん、男、男、男を生なみい、女なんて生なすもんでねえぞい。』と、一人がいふと、

『總領は女の方がいゝんだつて。』と、も一人がいふ。

『顔があんまりやつれたから、男だか知れない。』と、お節つあんが年寄りみだことを言つた。

『おつしよ様はどちらがいいと思ひやす？』と、お信ちゃんが口を入れると、

『さうだない、やつぱり男がいゝない。』と、師匠は笑つた。

春蠶、夏蠶、秋蠶。この三期の絲かへしがしばらく續いた。旦那様も義雄さんも、朝早くから社の方に出かけて一日姿が見えない。

『何時だい？』と、師匠が毎日眼鏡越しに時間をきいた。十一時を過ぎると、二人前のお辯當をつめて、それをお辰が両手に下げていった。

やすみを知らせる拍子木の音が、畑を越して幾打かを傳へる、纏れ合つてゐた簞の音が一時に確と止む。それが幾度か繰り返されて日暮になると、辯當を抱へた工女達がぞろぞろと門を出た。子供を背負つた絲取女が、繭包の風呂敷を下げて、明日一日の仕事を持つて行く姿なども娘達はよく見た。

その會社の一年の仕事も無事に終つて、留守居の男の女房が、白い前掛に道具をくるんで、閉ぢられた門の脇の小さなくぐりを出入した。

利益の配當に依つて、恵比寿講も賑にすんだ。冬の知らせの西の山には雪が降つて、我慢強い者もそれからは足袋をはく。霜がれた井戸の脇の松葉菊を摘んで、三杯酢の黄色い皿が旦那様の晩酌の膳に上つた。

漬菜あらひと大根干の時節が來た。師匠の家でもぼかぼかするやうな日を選つて、さわぎ半分の娘達に手傳つて貰つた。洗ひあげた漬菜の束を納屋に運ぶと、師匠は片つぱしから桶につめて鹽を撒いた。お鳥さんやお節つあんがその前に立つて鹽加減などをきいてゐると、

『先生先生、早く隠してくんつあんしよ。』と、お糸が、つとはひつて来て、ごそごそと俵のかけに身を潜めた。すると間もなく、

『おくちやん來なかつたがい。』と、彌生がきよろきよろしながら入口から中を覗いた。

『めつけた！』と、思はず彌生が大きな聲を出す、

『この人達はまあ……』と、師匠があきれたやうに腰を直してふり向いて笑つた。

『たれ鬼？……』と、お信ちゃんも母屋をもやのかけから飛び出して來た。

こんなこととして大根干の一日もすんだ。また煤拂の日には、大根の輪切汁に鹽鮭を焼いて、お晝飯が出た。おやつには熟柿が配られて、手拭を冠つた娘達が、顔をまつ赤にして箆笥などを運んだ。

それがすむと師匠は間もなく立派な結納物を一揃預つた。寺の前の寶屋と呼んでゐる親類からので、その夫婦が夏時分から頻に足を運んでゐた縁談がいよいよきまつたのである。お嫁さんはやはり一期前に來てゐたお弟子の一人で、師匠夫婦は表向ともに媒酌人になつた。

婚禮はおし迫つた年の内にあつた。彌生の家も縁つゞきになつてゐたので、その夜待女郎に頼まれて裾の長い着物を着せられた。

彌生は島田鬻に初めて結つた。それを翌日になると、母に隠れてそつと座敷の隅に行つてひとり

で根を解いてしまった。

『あら、やあちやん、島田はどうしたの?』と、お糸は待ち構へてゐたやうに、いきなり笑ひながらきいた。

『やあだ、大きらひ! あんな思い頭、極まりが悪くつて歩かれないもの。』

『やあちやんはもう十七だもの、島田に結つたつていゝんだわ。この頃の人はどうして島田をいやがんだつぺ。』と、お鳥さんは不思議がつた。

彌生の耳のかけには、昨夜のお白粉の名残がまだ残つてゐた。

六

お糸は暮の廿六日にK——町に歸つて正月を迎へた。今までとても二三日づつはちよいちよい歸つてゐたが、今度は思つたよりも少し長くなつて、一月ももう二三日を餘すばかりになつた。

ある日、夕餉をしまつてから、なんの氣なしにぶらりと店先に出て、眞鍮の火鉢のほの暖い胴を抱へてぼんやりお糸は表を眺めてゐた。硝子戸の外を荷馬車が續いて、水氣のない雪が時々はらは

らと散るともなしに散れてゐる。綿のふくれたねんねこ半纏で背中を圓くした子守が、赤い雪帽子の紐を胸元に結び付けて、手先でちよいちよい編棒をうごかしながら二三人來がかったが、店先に立つてゐるお糸の白い顔を見ると、お互に顔を見合して何か呟き合つた。するとその中の一人が音頭をとつて、

『二つとや……二つ二葉屋のお糸さん……お糸さん、赤い襷で砂糖かけ……砂糖かけ……』と、ふり返りふりかへり歌つて行つた。

お糸は帳場に坐つてゐた良助と顔を見合して、にっとして立ち上らうとしたところへ、勢よく郵便が來た。澤山な商用の端書に交つて、水色の封筒のは彌生からのであつた。お鳥さんのお産のことが知らせてあつた。男か女かは來て見てからのことと筆を切つてあるので、お糸は急にS——町に歸りたくなつて、祖母に土産のことなど相談した。

『姉様おめでたう！ どれまあ赤んぼ見せつさんしよ。』と、お糸は師匠に戻つた挨拶をするや否や、駆け込むやうに産室にはひつて行つた。お鳥さんは鉢巻の頭をそつと擡げてにつこりした。その傍の蒲團の中に、頭を眞綿で卷いた肉の塊が息をついてゐる。

『あらまあ。』と、お糸はそれに手をかけると、

『あ、おくちちゃん、今眠つてんだから。』と、師匠は慌て、後から聲をかけた。

その時からして、お糸はお鳥さんの位置といふやうなものが、一段と高いところに置かれたやうなのを覺えた。いつかお節つあんが、

『お鳥さんはお師匠様のお嫁さんだか、義雄さんのお嫁さんだか分らない。』と言つたのを、お鳥さんの態度に適切な言葉だと思つて、非常に感心したことがあるのを思ひ出した。さうしてまた、はいはいといふお鳥さんの返事は、切れるやうだと彌生が言つたのも思ひ出した。

師匠は赤兒の世話にばかりかまけて過した。一寸泣聲を立て、それと一番に飛んで行くのは師匠であつた。お鳥さんは殆ど乳母のやうな立場にあることが珍しくなかつた。

初着が染め上つて來ると、師匠は手づからそれを縫つた。孫振舞の手くばりが残なく出來ると、娘達にはその前の日から手傳つて貰つて、餅米を磨いだり、膳椀などを洗つたりした。その日になると、朝から親類の手傳人なども見え、赤飯をふかす白い煙があがつて、猫は物置小屋に押し込められ、魚を焼く匂が厨の中に満ちた。

燭の火のかけに、やがて人々の顔は赤くなつて、さわぎに合せる三味線の無茶な揆音が響いた。

五月の節句も賑にすんで、それからは師匠も少しは落ちついて針を持つた。

石竹の濃艶な花が咲くと、洗濯や張物が賑ひ、柿の實の色づく頃になれば、秋祭の使が村々から来た。それはどこの家でもかはりがなかつた。

師匠はある日、何を思ひ出したか、黒七子の紋付の羽織を出して来た。

『どうするんです？』と、お節つあんが怪訝な顔をしてきくと、

『久しく着て見なかつたげつと、丈でもたしたらまた着られつかと思つて。』と、師匠は脊すぢを摘んでものさしをあてた。

『おやおや四寸丈つきりない。』と呟いて、『やあちゃん、一寸これを引つけて見い。』

彌生は立ちあがつて、紋付の羽織に手を通した。

『まあ、やあちゃんの腰つきりない。』と、お信ちゃんが笑ふと、

『元祿の若衆のやうだ。』と、お糸が言つた。

『肩あげがなくても着れば着られる。』と、肩のあたりを撫でてみた彌生は、突差に二尺ざしを取つて帯の間にさし込み、風呂敷を三角に折つて冠つて、大手を振つて皆の前を歩いた。褌の形がよく出来ないと言つて、顔を眞赤にしてぢれてゐたお島さんも、ちようど火鉢の前に烟草をつめてゐた旦那様も、思はず笑つた。

この羽織を縫つてくれたその頃の弟子の一人は、今年はまだ三人の子の母親であることなども思ひ出されずにすんだ。

こんな日のうちに秋も暮れて行つた。

垣根に並んだ山茶花に赤い花が咲いて、曇の日に郵便屋の草鞋がぴしやぴしやと聞えて、お糸は膝の上のものを搔いやつて飛び出すのが常であつた。

『私んのは？』

『播かぬ種は生えぬ！』

顔なじみになつた年取つた郵便屋は、こんなことを言つて歸つて行つた。「横濱商報」が、ふわりと投げられて行く。

お糸はこの頃あまり様子が冴えなくなつた。師匠に隠れては無暗に方々へ長い手紙を書いた。さうしてそれらの返事に依つて、自分の決心や方法をとらうとするかのやうに見えた。彌生に相談をして見ても、そんなことにはお互にまだ子供同様な二人、それではその人が厭なのかときかれれば、決して決してさうではないと首をふるし、なんとはなしに結婚といふものに怖を持つ心は、當事者でない彌生にはよく解らなかつた。

四五日前から師匠の許へは祖父からの信書が届いてゐる。來年は十九の厄年故、年のうちにかねがねきめて置いた婚禮をさせるべく、近々に迎への者をさし向けるからとの文面であつた。

いよいよ迎への者が來るときまつた二三日前から、お糸は仕事も手に着かずに泣いてゐた。師匠にかれこれ慰められても、慰められれば慰められるほどなほ悲しくなつた。前の日には師匠から暇を貰つて、揃つて公園に行つた。記念の寫眞をうつして、一日湯になど浸つて楽しく遊び暮した。お名残だからといつて、その夜は師匠の家でもお汁粉の御馳走があり、お糸も久々に友達の癖などをまねて皆を笑はせた。

迎へには祖母が來た。いよいよとなつたその間際、お糸はぴたりと師匠の前に手をついて、
『先生……』と言つたまゝ、涙をはらはらとこぼした。誰も誰も目をしばたいた。

『旦那様、ながながお世話様に……』

いゝからいゝからと師匠に追ひ立てられるやうにされて、下駄をはいて外に出ることは出たが、祖母の袖のかけから家の中を振りかへつて、臺所から首を出してゐるお鳥さんを見ると、

『姉さん！』と言つたまゝ、被布の袂で顔を蔽うた。

『さあ遅くなつたからいんべいんべ。』と、彌生は赤い眼をして先に立つた。

みんな停車場まで見送った。

七

『裏二階がやうやう出来あがりました。』

今日前の家のお禮さんが来て、すっかり着物の肩あげを取ってしまひました。

もう一週間の命、やあちやん、その日にはきつときつと来てね。もう諦めたの、それでも今日もまた泣いてゐる。やあちやん、きつと来てくれるでせう、きつときつとね。』

二三日してから鉛筆の走りがきで、右のやうな手紙が彌生の許へ届いた。

しばらくはお糸の噂が絶えなかつた。はじめからしまひまでのお糸の素振が、殊に師匠の胸に深く喰ひ入つてゐた。

丁寧な招待状が、改めて師匠の一家と彌生の許へ来た。兩家とも行きはしなかつたが、裏地か何かを祝物として送った。友達は集つて刺繍入の半襟を買つて送った。

『やあやあ拂ひませうか厄おとし厄ばらひ。』

昨日の夜に、例年のとほりこの聲を聞いて、彌生は十九になった。

この年はもうお島さんはお針に來なかつた。お節つあんも家が忙しいと言つてはちよいちよい休むので、彌生やお信ちゃんなどが頭株となり、田舎から新に一人お糸のかはりになつた。

花が咲く頃、お糸は一度供の者を連れて挨拶に來た。その時は小學校の新しい校舎も出來上つて、高見の運動場から、顔色の悪い女教師が、お糸の水際立つた丸髷姿を、目を敬てゝ見てゐた。華な小豆色の羽織が、ちらりほらりと出來た長家の女達の目を引いた。

お島さんは、ある日顔色を悪くしてお節つあんの家へやつて來た。ちようど出來あがつた着物に火熨斗をかけてゐたお節つあんの前に坐つて、ものをも言はずつつ伏してしくしくと泣き出した。驚いてお節つあんがいろいろときくと、知らぬ間に縁談がきまつて、お島さんには少しも知らせずに先方へ返事をしてしまつたのだといふ。私の家に來るやうな男は、どうせ碌でなしの曲者か何かにちがひないと、お島さんはたゞかうばかり言つて泣いた。

けれどもどうも仕方がなかつた。心の晴れるまで——夕方まで泣いて泣いて、お節つあんに送られて裏門へ出た。お節つあんの家は造酒屋なので、大きな六尺桶が幾つも倉の脇にころがつてゐた。

二人はなほもそこでしばらく立話をした。

お島さんの婚禮は非常に時日を急いだ。袴をはいた子供が、よびつかひの紙札を持って、親戚知己の家に配つて歩くと、そらいよいよ泉樓の婚禮が來たと人々は言ひ合つた。

三日に亘つた婚禮の中の日、花嫁は見違へるやうに飾られて、お茶たての座敷に坐つて師匠や彌生などとまみえた。商賣柄とて、小さな座敷が幾つにも別れてゐるのを、いつの間にか連中はその一つに隠れてゐると、かひがひしく介添をやつてゐたお節つあんは、花嫁のお島さんを一寸偷んで來た。その日のお島さんの顔にはもう涙は見えなかつた。

廊下の外を、手傳の女達がばたばたと驅けて通つた。はなれの座敷からは、亂れ合つた撥の音に、疇走つた藝者の唄が聞える。四人はそれらの物音に遠く耳を貸して、膝をつき合せながらその上手と手とを握り合つてゐた。

誰も一言もものを言はなかつた。

お節つあんは寂しい人となつた。お島さんの心は自分の心、自分の心はお島さんの心と信じてゐた心も、我から氣が置いておのづと足も遠くなつた。

彌生はだんだんお節つあんに近づいて來た。その頃はお針に行つても、師匠の顔色を窺つて、健ちゃん健ちゃん子供の子供の機嫌を取るのが、時によると堪へられないほどの苦痛を覺えた。考へるでもない考に捕へられて、口を結んだら飽くまでも、くだらぬ追従にそれを解きたくはない。

傘をつぼめて雪あがりの空を眺めると、眩しいやうな冬の光に瞼を射られて、思はずも目を落す足許に、足袋のよごれの目に立つのも物悲しく、シヨールに腮を埋めてとぼとぼと燈の入つた街をかへる。その道順の指物師の工場に、悪戯口を浴せかける大工の姿も、冬は障子に圍まれて心安く、ぱつと燃え立つた鉋屑の火が、障子に一ぱいになつて、凍つた道を照す時など、むらむらと暖い感情が湧いて、このまゝのこの思を書いておくるに適當した誰かに、この感情をそのまゝに書いて送りたいと思ふ。それも併しまた陽炎のやうに消えて、日々の營に追ひつかれまいとあせつてゐるやうな、餘裕のない家内の空氣に息づまるやうな思をした。

彌生に取つてお節つあんの胸は廣いやうな氣がした。話聲の大きなのからして、苦勞などといふけちなものはその胸に集ふべきやうもなからうと思つた。お針の往きかへり、或は師匠の方を休んで、お節つあんの家で一日を過すことなども度々あつた。

そんな時には、お節つあんは別段彌生には構はず、帳場に坐つて樽の番號を控へたり、大きな聲をして村の客などに愛想を言つたりしてゐた。

日に日に二人のしたしみは増した。それと確に口に出して言はなくても、彌生にはお節つあんの心の全部が解るやうになつた。師匠の例の手で見合をさせられた時に、見事裏をかいて逃げ出した話などを、お節つあんは得意でした。彌生はまたお節つあん自身でも知らないであるある心を見抜いてゐた。

お節つあんの家には、夏やすみになるとよく書生連が集つた。みな甥とかまたは伯母の子とかいふ親類の者で、氣の置けない一家の人達をいゝことにして、ゐたいだけゐて遊んで行くのである。そのうちに大學の法科に籍を置いてゐる糺さんといふのがあつた。悪口の上手な人で、負ぎらひのお節つあんをいつも口惜しがらせてゐた。

ある夜、お節つあんの家から枝豆の使が來たので、彌生は團扇を持つてぶらぶらと出かけて行つ

た。お島さんも湯あがりの白い顔をして来てゐた。縁側に續けて涼臺を置いて、蚊やりの煙の流れる下で、さまざまな世間話に花が咲いた。表の通には家毎を渡つて歩く假聲つかひや、編笠で流して行く冴えた撥音なども聞えて來た。

十一時を打つたのに初めてびつくりして、お島さんは慌てゝ立ち上つた。お節つあんがそれを送つて行かうといふと、僕もと糺さんが尻輕に立つて、彌生をませた四人は、そろそろ葎を下しかけた街を並んで歩いた。お島さんの家は田圃を越した別天地に廓をなしてゐるのである。

『岩井の妾……さうさうお瀧さんて一體今年幾つなの？』と、お節つあんは言葉を繼いだ。

『さうさね、三十八か九だらう。もう婆あだ、何しろ俊ちやんが十九だからね。』と、糺さんは巻煙草の火をふいと捨てた。

『俊ちやんて綺麗でせう。』

『うん、綺麗だ、毛が赤くつて。』

『まあ。』と、横からお島さんが笑つた。

『今にその俊ちやんを押しつけられんだつぱい、きつとね。』と、お節つあんがちらりと白い眼をすると、

『さうだ、さうしてあの別荘が僕のものになるんだ。』と、糺さんは笑つてゐる。

『まあ。』と、またお島さんが笑つた。

『はいはい！』と、勢よく袖を掠めて俥が通つた。それをやり過して、

『どこかの大盡どんがお乗込だ。』と、お節つあんが呟く。

一寸の間に店の燈がとだえて、二三步先に立つた糺さんの白緋がほんのりなつたと思ふと、浮き出したやうな燈の軒が田圃の中の高みに並んだ。

『なるほど不夜城は違つたもんだ。』

糺さんは口笛を吹き出した。女達は黙つて並んでその後には續いた。

それを渡れば圍の中にはひつてしまふといふ土橋の袂で三人は別れた。

『さよなら！』

『さいなら、おやすみなんしよ。』

お島さんは草履の音をたて、小きざみにあかるい下をくゞつて去つた。肩のあたりの圓い輪郭が、くつきりとあかりを受けてやがて消えた。

『いゝ奥さんになつたね。』と、糺さんがいふ。

『お髯さんは、署に行つて大自慢なんだつて。』と、お節つあんは鼻のあたりに薄い笑を浮べた。烟草の専賣局に出てゐるお島さんのお婿さんを、お節つあんはいつもお髯さんと呼んでゐた。

その夜のことを彌生はいつまでも覚えてゐた。さうしてなぜかお節つあんのことを考へる度に、きつと紵さんの白紵姿も思ひ出した。

九

九月の秋祭から夥しく涼氣を増して、思ひ出したやうに人々は裕の用意を急いだ。お節つあんのお母さんが、ある日眼鏡を光らして朝顔の種を茶袋に入れてゐると、聞きおぼえのある足音がして、彌生が慌しく裏口から入つて來た。

『やあちやがい、今日は。』

『をばさん、お節つあんは？』と、彌生はいつになくそわそわとしてゐる。

『お節がい、お節は今倉さ着物出しに行つたの。まあ上つてなんしよ、今ぢきに來つから。』

彌生は縁側に腰を下して、小八つ口に両手を入れて乳を押しへた。ものを考へる時や、ぼんやりし

てゐる時のこれは彼女の癖であつた。

風呂場の屋根に重い枝を乗せた柿の葉が、さやさやと揺れる度に、つめたい風が脇の下を撫でた。

『初茸煮しめはようごすかあい。』

茸賣の女が格子戸を掠めて行つた。

『なんだいやあちゃん、なにぼんやりしてんの？』と、例の元氣な顔をして、鍵をちやりんちやりんいはせながら、お節つあんが出て來た。

『お節つあん、あのない、私あさつて東京さ去ぐの……』と、急に彌生の顔はにこにこ崩れた。

『東京さ去ぐえ？……』

『えゝ、あさつて。』

『一體まあどうして？』

『伯母さんの看病にいぐんだ。昨日手紙が來たもんだから、急にいぐやうになつたの。女中一人で寂しいんだつて。』

『さうかい、よくお母さん達あんだのことやる氣になつたのない。』

『自分から去ぐ去ぐつてさう言つたんだもの。』

『だけつとすぐ歸つてくんだっばい。』

『えゝ……』と、彌生の返事は鈍つた。お節つあんはすぐに見て取つて、

『それともまたもう歸んねつもり？』

『……まあどつちにしても一度は歸つて來つらえ……ほんとにどうなつかわかんねの。』

彌生は東京に憧れてゐた。たゞ嫁入つて、たゞ母となつて、それが別段厭といふのではないけれど、もう少しかした生活が自分には定められてあるやうな氣がしてゐた。さうしてそれはたゞ東京にのみ潜んでゐるものと思つてゐた。上京は彌生にとつて定められた運命の絲を手繰に行くやうなものであると、さう思へてならなかつた。東京、東京、彌生には上京がたゞ嬉しかつた。

『糺さんはやつぱり本郷にゐんの？　もし行けたら尋ねて見つら。』

彌生はこんなこともいつて、用意に忙しいからと、そこそこにして歸つて行つた。

その日は、お信ちゃんもお島さんも停車場まで送つてくれた。お節つあんは待合室の隅に彌生を呼んで、

『もしもしばらく歸んねつもりなら、そのうち私もあとから出て行くわい。待つてなんしよ、きつと出て行くから……私も今あの親類の方にきめられさうなんだげつと、どうしても厭だからきつと

出て行く。少し勉強しなくちや、あんまりなんにも知らなくつて馬鹿にしられつから……やあちや、これ少しばかりだけつと切手でも買つて……』と、無理に錢別の紙包を彌生の懷に押し入れた。それから二年は造作もなく経つた。

お糸はある日出來、上つて來た子供の寫眞を贈るとて、彌生の許へ次のやうな手紙を書いた。『早いものねえ、一郎はもうこんなに大きくなりました。動いて動いて仕方がないのを、やうやうのことで寫したのですよ。二時間ばかりもかゝりましたの。母に似た面影があるかどうか、まあ見て下さい。

お節つあんもいよいよ嫁入しましたのね。その家のことを、うちの店のものがよく知つてますが、大變大きな穀屋ださうですよ。店のものつてば、良助は去年の十二月入營して、一等卒ですつて。

お信ちゃんは今のお祭に一寸來ました。おとなになつたこと、びつくりしました。なんだか家では手がないから、養子をして家に置くつて言つてるさうですわ。

山の寶屋のことは、この頃少しも消息がわからなくなりました。だつてお節さんは、——町にはゐなくなるし、お信ちゃんは筆不精なんだもの。健ちゃんはずいぶん大きくなつたでせうよ、一

郎より一年早いんだから。お鳥さんはまたあとが出来るつて話ですよ。

小説なんかこの頃ちつとも見ないの。先達て前の家の良さんが持つてたので、花袋の「妻」を
読んで見ました。「良人の告白」がも一度読んで見たくなつて、この間お信ちやんのところへ頼ん
でやつたけれど、どうしたかまだよこしてくれない。

私も随分御無沙汰するけれど、やあちやんもあんまりでないの、この間の手紙に、つまらない
つまらないつてばかり書いてあるんだもの、氣になつて仕方がないわ、やあちやんはまだ人にな
らないからだめ、ほゝゝゝ。

ほんたうにこれはまじめにいふんだけど、やあちやん、いつそのこと田舎に歸つて相當なと
ころに嫁いだらどう、悪いことは言はないつもりよ。

それともまたね、何か目的があるなら、少し位の助力はできると思ふの、十分なことはできな
いけれど……お氣に障つたら御免なさい。伯母さんの家にゐたつて、いつまでさうしてたつてつ
まらないぢやありませんか。なんだか委しくうち明けてくれないからわからないけれど、やあち
やん大變苦しんでるやうね、いぢめられてるんぢやないかと思つて心配で心配で。

あゝ書いた書いた、こんな長い手紙幾年ぶりで書いたでせう、やあちやん私が言つたことよく

考へてね、さよなら。』

返事はすぐには来なかつた。五六日過ぎてからやうやう端書が届いた。

『お手紙ありがたうよ、一ちゃんのお寫眞もたしかに。そのうち悉しく御返事を書きます。

たゞ涙がこぼれます。』

たゞこれだけで、感謝の意味で涙がこぼれるといふのか、または自分の身に關して泣けるといふのか、お糸には一寸わけがわからなかつた。

筆跡といふものに殊に氣を付けた彌生の字とは思へないほど筆が亂れてゐた。

【入力者注】 以下の修正を行いました。

435-13 紙燃 ↓ 紙撚

447-2 — K町 ↓ K—町

449-8 揆音 ↓ 撥音

455-3 親戚知巳 ↓ 親戚知己

底本…「水野仙子集」

大正九年五月卅一日発行

初出…「中央公論」

明治四十三年十二月號

テキスト入力…小林 徹

公開…平成三十年二月十五日

修正…令和二年四月二十九日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)